

2022年9月18日、斎藤幸平著「人新世の『資本論』」（集英社新書）の
ご参考までに 2023年5月28日 折戸 真

昨年（2022年）春、大学のクラス会がコロナ禍のため中止となった時、私の近況としてクラスへ報告した文を、今回、一部改変したものです。

○ 2022年3月31日には、馬場悠男先生の企画監修によるNHKBSプレミアム「“絶滅人類” ホモ・サピエンスを映す鏡」を見させていただき、大変感動いたしました！！ 大感謝です！！

私の拙い理解では、環境に過剰な負担をかけない生き方をした頑丈型猿人のパントロプス・ボイセイに対して、ホモ・ハビリス、ホモ・エレクトス、ホモ・サピエンスは、（欲張りな）浪費型人類への道歩んできたということでしょうか。人類は、「業」とも言うべき「過剰な欲望」に振り回されずに、コントロールし、むしろ、それを次の発展のために、いかに「賢く」生かしていくかが、今こそ問われているのではないのでしょうか。

☆ ホモ・サピエンスの2つの顔 賢いヒト *sapient wise* と欲張りなヒト

○ 読書；最近読んだ本から2冊。

① 集英社新書 斎藤幸平著 「人新世の『資本論』」

<「新書大賞 2021」受賞作品！> 45万部突破のベストセラー

賛否両論ある本ですが、今の時代に必読の本かも。

この本のカバーには「人類の経済活動が地球を破壊する『人新世』= 環境危機の時代。気候変動を放置すれば、この社会は野蛮状態に陥るだろう。それを阻止するためには、資本主義の際限なき利潤追求を止めなければならぬ・・・（以下略）」とあります。

著者の本文や発言その他から

「利潤を増やすための経済成長をけっして止めることがないのが資本主義の本質なのだ。 その際、資本は手段を選ばない。気候変動などの環境危機が深刻化することさえも、資本主義にとっては利潤獲得のチャンスとなる。山火事が増えれば、火災保険が売れる。バツタが増えれば、農薬が売れる。・・・」

「SDGsは『大衆のアヘン』である！」（今や、かなり有名になった、大胆な発言）「企業はSDGsをPRに使っているだけ」「消費者もエシカルと言って満足しているだけ」「電気自動車走行の本当の効果は？。レアメタルの問題はどうする？」「真の問題は、経済システムそのものに横たわっていることに気付かないといけない」著者は、従来の資本主義のあり方を厳しく批判し、晩期のマルクスの思想を基礎にした

「脱成長コミュニズム」（具体的方法は後述）を強く主張しています。

視点としては非常に鋭く、私は強く共感していますが、

ある読者は「気候危機って言ったって、どうしようもないんだよ。人間なんだから、欲望にまみれていて当然。資本主義で行くしかないんだし・・・」と。

冒頭に記した、馬場先生によるNHKBSプレミアムで学んだ「過剰とも言うべき欲望を持ったホモ・サピエンス」は、はたして、本当に「賢く」、世界を覆う格差、貧困、環境問題を解決できるのでしょうか???

☆ 斎藤氏の執筆の動機

▲ スウェーデン人の環境活動家グレタ・トゥーンベリさんの訴えに対する「応答」として書いたと。

▲ 「資本主義を続ければ、地球の大部分は人間が住めない環境になるでしょう。

今の僕たちは、便利な生活をしています。だけど、まさにその便利さは、将来の世代の繁栄の条件を破壊しているし、現在でも途上国からの収奪のうえに成りたっているものです」

☆ 「脱成長コミュニズム」の具体的方法→「コモン」

▲ 利潤最大化と経済成長を無限に追い求める資本主義では、地球環境は守れない。

「脱成長」は「平等」と「持続可能性」を目指す。

▲ 「コモン」common とは、まったく聞きなれない言葉ですが、マルクスや斎藤氏にとっては最重要語句。

▲ コモンとは「人々に共有され、管理されるべき富」の意味であり、コミュニズムの語源。

▲ 人々が生産手段だけでなく、地球をもコモンとして管理してゆく。

▲ 「コモンは、アメリカ型新自由主義とソ連型国有化の両方に対峙する「第三の道」を切り拓く鍵。つまり、市場原理主義のように、あらゆるものを商品化するのでもなく、かといって、ソ連型社会主義のように、あらゆるものの国有化をめざすのでもない」 第三の道として、平等な社会実現のために、みんなが必要とする、たとえば、水、電気、インターネット、教育、医療、介護などを共通財産として、みんなで管理していく。できるだけ無償で安価で。

【投機、投資の対象から引き上げてしまう】

もちろん国や自治体の力も借りるが、専門家任せでなく自分たちで。市民の手で！！

【参加型の社会主義】【自治】

※ いきなりすべて資本主義を否定しようとするのではなく、行き過ぎた市場原理主義に対して、「コモン」の領域をふやしていきたい。

※ (市民が管理運営するのは) 仕事がふえるので「面倒くさい!」。しかし、その感情こそが、いつまでも資本家に支配され続けてきた原因か。斎藤氏は「資本主義の怖いところは、その中に生きてると、それしか選択肢がないと思込ませる力があるところです」と

※ コモンでは、信頼と相互扶助、「助け合い」の精神が大切になる。

※ もちろん苦労はあるが、しかし、市民参加型のコモンによって、人々の生活を安定させることができる。地球も救われる。

☆ 本文では「脱成長コミュニズムが世界を救う」という一章を設け、脱成長コミュニズムの社会の柱として5つ挙げていますが、文が長くなりますので、項目のみ書きます。(説明略) (ゴメンナサイ)

1. 使用価値経済への転換。

ex、マーケティングやコンサルの仕事は、資本主義の下における価値の創出の仕事であり、本質的には意味のない仕事である。

2. 労働時間の短縮。

3. 画一的な分業の廃止。

4. 生産過程の民主化。

5. エッセンシャル・ワークの重視。

☆ 実践例（説得力あり）

・スペインのバルセロナ他（説明略）

☆ 著者は「おわりに」の項で

「マルクスで脱成長なんて正気か——。そういう批判の矢が四方八方から飛んでくることを」を覚悟のうえで、本書は始まった。（中略）「脱成長」という言葉への反感も、リベラルのあいだで非常に根強い。それでも、この本を書かずにいられなかった。

最新のマルクスの研究の成果を踏まえて、気候変動と資本主義の関係を分析していくなかで、晩年のマルクスの到達点が脱成長コミュニズムであり、それこそが『人新世』の危機をのりこえるための最善の道だと確信したからだ」と。

☆ 感想

私には、正直、十分理解しがたい部分もありますが、著者の「心意気」と勇気にとても感動いたしました！ また、世にほとんど知られていなかったマルクスの晩年の膨大な研究ノートにとりくんだ著者の戦いにも感銘をうけました。従来の古いマルクス観を大きく変えた !! ※原本の内容をかなり略しています。また私の勝手な解釈も含まれていますが、お許しを。

②「物語 ウクライナの歴史」 元駐ウクライナ大使 黒川裕次 著

2002年8月25日 初版。 2022年3月25日 11版

本の帯に「ロシア帝国やソヴィエト連邦のもとで長く忍従を強いられながらも、独自の文化を失わず、有為の人材を輩出し続けたウクライナ。（以下略）」とこの本から、島国に住む日本人には想像もつかないウクライナの苦難の歩みを、読み取れることができました。以下は、本文の一部分の抜粋ですが、ご参考まで。

☆（地政学上）

ヨーロッパでウクライナほど幾多の民族が通ったところはない。ウクライナは西欧世界とロシア、アジアを結ぶ通路であった。それゆえにこそ、ウクライナは世界の地図を塗り替えた大北方戦争、ナポレオン戦争、クリミア戦争、二次にわたる世界大戦の戦場となり、多くの勢力がウクライナを獲得しようとした。ウクライナがどうなるかによって東西のバランス・オブ・パワーが変わるのである」

「フランスの作家ブノワ・メシャンは、ウクライナはソ連（当時）にとってもヨーロッパにとっても『決定的に重要な地域のナンバーワン（Espace vital No. 1）』といている」

☆（二つの大戦）「第一次世界大戦の際、ウクライナ民族主義者政府が一度に多数の敵と戦わねばならず、結局崩壊したのと同じように、今回（第二次世界大戦）においても、ウクライナ民族主義者は複数かつ強力な敵を相手とせざるをえず、・・・（以下略）」

☆（国土）

▲ 「ウクライナは面積ではヨーロッパでロシアに次ぐ第二位」

▲ 「農業については、世界の黒土地帯の30%を占める。・・・

二十一世紀に世界で食糧危機が起きるとすれば、それを救う可能性のある国といわれている」

※ 「国連総長 ウクライナ侵攻で、世界的食糧不足を警告」「届かぬ小麦 アフリカ悲鳴」

（2022年5月20日付け朝日新聞の見出しから）

▲ 「国旗は上が大空を表す青、下が大地（麦畑）を表す黄の二色旗」

☆（ウクライナと日本）

▲ヤルタ会談

「ウクライナの地でなされた決定が、ウクライナのみならずその後の日本の運命をも左右するほどのものであった・・・」「ソ連の対日参戦については、ルーズヴェルトがスターリンに対日参戦を強く求めた。スターリンはその対価を要求した。（中略）南樺太、千島列島を要求した。ルーズヴェルトはそれを承認した」（※ チャーチルを除外して）

▲姉妹都市

1965年、横浜市とオデーサ（オデッサ）市 <いずれも港町>

1971年、京都市とキーウ（キエフ）市 <いずれも古都>

※キーウ（キエフ）には「京都通り」がある。

▲共通点

ψ お互いに古い歴史と文化をもち、それを大切に守ってきたこと。とくにコサックと侍は、勇気、名誉、潔さなどの共通の価値観をもっており、これが現代にまで受け継がれていること。

ψ 両国とも農業を基礎とした社会であったこと。

ψ 両国とも石油・天然ガス資源に恵まれていないこと。しかし、教育には熱心で教育水準が高いこと。

ψ 両国が世界で核の悲劇の直接の被害者であったこと !!

○ 映画鑑賞

世界各国の名作を上映し続けたミニシアターの元祖「岩波ホール」（神田・神保町）がまもなく（2022年）7月29日に、惜しまれつつ、54年の歴史の幕を下ろします。新型コロナウイルス感染症の影響とは言え、一ファンとして、とても残念です。

先日やっと、現在上映中の「メイド・イン・バングラデシュ」を見に行き参りました。映画の舞台となったバングラデシュでの事故（5つの縫製工場が入った商業ビルの崩壊、1000名以上の死者）については、斎藤氏の「人新世の『資本論』」にも紹介されています。バングラデシュは『世界の縫製工場』の役割を担い、そこでは、ZARA、H&M、ユニクロ、Gapなど世界のファストファッションの製品の多くが、低賃金と厳しい労働環境で製造されています。

※ 若い女性が、固い椅子でミシン、一日10時間以上週6日。稼ぎ、月、良くても5000～6000タカ（約6700～8000円）「誰かの犠牲の上に築かれた、豊かさや幸せなんて、あってはならない」ヒロインは労働法を学び、夫の反対や経営者の脅しにも屈せず、組合結成を阻止しようとする政府と企業の共謀をも打ち破っていく。実話を元にした映画であり、日本人として是非見るべき映画だと痛感いたしました。